

## キタキツネのキキ

9

作 なかむら よしひろ

しばらくするとお母さんや二二のいないさびしさにもなれ、キキは以前のように道ばたや展望台で人から食べものをもらう生活に戻りました。

8月のある朝のことです。キキは背中がかゆくて目が覚めました。きょうに後ろ足でかいてみましたが、かけばかゆほどかゆくなります。むきになってかいているうちに毛がぼつと抜け、ひふからは血がにじんできました。それでもかかずにいられないほどかゆかったのです。キキには分からなかったのですが人間の食べものを食べるキツネはどういうわけかひふ病になりやすいのです。

夏の間は湖に遊びに来る観光客がたくさんいたので、キキはおなかをすかすことがありませんでした。それが9月に入り、湖に冷たい風が吹き始めると観光客の数はぐっと少なくなりまして。とくにへいじつは食

べ物をくれる車が一台も来ない日もありました。でも、キキにはその理由がわかりません。いつもの展望台の駐車場に行ってみても車は一台もとまっています。ゴミ箱をあさっても食べられそうなのは全部カラスに食べられたあとでした。そんな時にはしかたなく木の実などを食べました。けつしてネズミや昆虫をとろうとはしませんでした。たぶん食べようとしても、えものをとる訓練をしたことのないキキにはとれなかつたでしょう。

10月に入ると湖のまわりのカラマツがあざやかながね色に染まりました。ナナカマドも真っ赤な実をつけました。それを見るために休日には観光客が来るようになったのです。夏休みの時ほど多くはなかつたのですが、キキはそんな観光客から食べ物をもらっていました。でも日がたつにつれキキに食べるものをくれる人が少なくなりました。そのわけはキキの姿にあったのです。

いぜんはキキを見つけると観光客はきそってカメラを向けたのですが、今は写真をとる人は誰もいません。それどころか、キキが近寄っていくと、「きたないキツネだなあ、あつちへ行け、しっしっ」

「ひふ病にもかかっているわ、こん

なキツネがエキノコックスをもって「いるんじゃない」と言われるしまつで、もちろん、こんな人からは食べものももらえません。

確かにキキは子どもの頃のように金色に光る毛皮を身につけていませんでした。全体に薄汚れた茶色で背中からおしりにかけてはところどころひふ病で毛が抜け落ち、おまけにかさぶたがついていました。これでは誰も写真にとりたいとは思わないはずです。

そのころキキは時おり山の中できれいなめギツネを見かけることがありました。なんどか声をかけようと近づいてみたこともありましたが、そのめギツネはキキをさけているかのようにどこかにかくれてしまっていました。

ある日のこと、キキがいつものように観光客のところへ行こうと山を下り始め、角を曲がった時のことです。ぱったりそのめギツネに出会いました。めギツネはいっしゅん身をこわばらせ後ずさりしました。せつかくのチャンスです。キキは思い切つて声をかけてみました。

「ねえ、君……するとそのめギツネはキキがしゃべり終わらないうちに、」

「なによ、あなたはいつもあたしの後ばかり追いかけて。そんなきたな

い体で私にちかよらないで」

「そう言う道ははいっぱいキキをさけるようにして山の上へ走って行ってしまったのです。キキはみじめで、そしてくやくして食べ物をもらいに行く元気をなくし、そのまま巣にトボトボと歩いて帰りました。

あれほど見事ながね色だったカラマツの葉はあつという間にちつて、そのかれ葉で道路ががね色のじゅうたんをしいたようになりました。

そのじゅうたんも冬の冷たい風が吹きするとみんな飛んでいってしまいました。朝がたはめつきり冷え込んで湖にはゆげのようなきりがたちました。そしてついに初雪が降りました。北海道の長い冬がいよいよやって来たのです。

キキは1週間なにも食べていませんでした。なんとか食べることできた木の実も今は雪に埋もれてしまつてもう食べることができません。道路にじつと座つて通る車を待ちました。でも通るのはトラックやライトバンで、そんな車はキキには見向きもせずに通るだけでした。

キキはあきらめて山の方に向かいました。山に行けば何か食べられるものがあるかもしれないと思つたからです。

(6月号へつづく)